

ある留学生のライフ・ストーリー

花 見 槇 子

The Life Story of an International Student in Japan

HANAMI Makiko

〈Abstract〉

This is a life story of an international student from an African country. In the last few months of his study in Japan, he has told his story to the author in English.

John Angutsa (pseudonym) was born and raised in a rural community far from Nairobi, the capital city of Kenya. He received his primary and intermediate education there and studied at the Department of Engineering of Nairobi University. He was trained as a land surveyer and worked for the government from 1990 to 94. Then, he was granted a scholarship from the government of Holland to study for the master's degree for two years. He went back to his country and was reemployed by the government and also worked at an institute of surveying and mapping established by JICA (Japanese International Cooperation Agency). His relationship with JICA made it possible for him to apply to the fellowship offered by the Japanese government. He was granted the fellowship and came to Mie University in 2000. He studied at Mie University for over three years for Ph.D. overcoming the problems including the loneliness being away from his family. As a Christian, his human relationship developed through Church. He is determined to go back to his country which is the only place he can truly feel at home.

キーワード：留学、家族、人間関係、奨学金、帰国

はじめに

今や 11 万人に達する留学生が世界各国から渡日し、それぞれの一生の数年間を日本で過ごしている。しかし、彼らが、日本をどのように経験し、その後の生活にどのような影響を受けたかについての詳しい研究はまだ乏しい。ここに記す事例は、ひとりの留学生の半生記である。

ジョン・アングサ（仮名）は、1966 年にケニア西部の田舎に生まれた。ナイロビから 340 キロ離れ、道路の状態がよくなかったので、首都に出るには長い時間がかかった。そこで、小学校とハイスクールに通い、それからナイロビ大学の工学部で、土地の測量士と

しての勉強をした。その後、1990年から94年まで、政府の国土省に雇われ、働いた。1994年、オランダ政府から奨学金をもらって最初の留学をし、地図作製に関する修士号を得た。2年間の修士課程の後、国に帰り、政府に再雇用された。またこの頃JICA（Japanese International Cooperation Agency）とコンタクトが出来、JICA派遣の日本人と共に4年間働いた後、文部科学省の奨学金を得て日本に留学した。

彼とのインタビューは2004年の5月から7月にかけて3回に渡って英語で行われた。以下に、彼の半生をインタビューの内容に沿って再構成する。

家族

アングサの家族は、両親と、彼自身を含めて12人のきょうだい（男4人、女8人）である。家は貧しかった。父はハイスクールの教師である。母は元専業主婦だったが、生活が苦しかったので、洋裁を習い、洋裁師として必死に働いた。やがて、村の技術学校で洋裁の先生になり、子供たちの学校の授業料を払うために努力した。アングサは全くの田舎育ちで、初めて都会へ出たのはハイスクールに入ってからだった。

父は近くの村の出身で、結婚して移り住んできた。したがって親戚は全員同じ地域に住んでいた。父の影響で、子供たちのほとんどは教師になった。きょうだいは男も女も皆教育を受けた。村では家畜の世話をしたり両親を助けることの方が大切だと考えられていた時代に、この一家だけは、教育を最も重要なことと考えていた。

父は教育の大切さをキリスト教の宣教師たちを通して学んだ。祖父が最初に、宣教師たちと知り合い、彼らは祖父に影響を与えた。宣教師たちは、父を預かり教育を受けさせることを祖父に説得し、父を教師にした。それで、父も自己資金のありったけを自分の子供たちの教育に注ぎ込むことになった。

子供の頃の最初の思い出は、生活の苦しさだった。学校から帰っても昼食がなかった。母が、何もないよ、と言った。母も必死で働いていたのに、それでも子供たちに昼食を食べさせることができなかった。一度に5人もの子供がハイスクールの寄宿舎に入っていたので、父の給料では到底足りなかったのだ。

奨学金は一部の最もよくできる子供にしか与えられなかった。父の方針で、子供たちは全員少なくともハイスクールを卒業した。大抵は大学にも行った。それが父の唯一の自慢、財産だった。

多産の意義

アングサの両親は、経済的に困窮しているにもかかわらず、なぜ、そんなに多くの子供をもったのか。それは、祖父や父の立場が一般の人とは違っていたことに由来する。祖父

は部族のチーフだった。ケニアの独立がなければ、父がチーフを次ぐはずだった。そしてアングサも同じ立場だった。ということは、父は男の子を持たなければならなかった。アングサの上には女の子ばかり6人いた。両親は、どうしても跡継ぎの男子が生まれるまでがんばらなければならなかったのである。アングサが初めての男の子として生まれたがそこで子作りをやめるわけにはいかなかった。その頃、多くの子供たちがマラリアで死んだ。だから、子供は多ければ多いほうがよかった。現在でも人はマラリアで死ぬ。以前よりはよくなったが、年間3万人程度がマラリアで死ぬし、子供の死亡率の方が高い。

父は、チーフの息子として大家族をもつことをためらわなかった。祖父は8人の妻と多くの子供たちを持っていた。父も第二夫人を娶ろうとしたが、アングサが生まれたのでやめた。彼の母はひとりで12人の子供を産んだのだ。母は1997年に亡くなるまで、ずっと健康だった。父はまだ壮健で、現在76歳だが、アフリカでは長寿の方だ。

祖父も大変高齢だった。子供が大勢おり、尊敬され、いろいろな人が彼に会いに来て、たくさんの贈り物をもたらした。アングサが子供の頃、彼の屋敷は、彼に会いに来る人たちでいつもにぎやかで、訪問者は収穫の贈り物などをもってきた。彼は短気で時に怒りっぽかった。人々は彼のことを尊敬し恐れてもいた。アングサは子供だったので彼のことは怖くなかった。孫にはやさしかった。

祖父は死ぬまでチーフだったわけではなく、死んだときは一介の人だった。独立政府が世襲制を廃止し、チーフになるにはそれなりの教育と訓練を受けた人でなければならなくなった。彼の部族社会の中の王国は崩れ去った。彼は高齢で、すべてが終わった。しかし彼は、死ぬまで一種の威信を維持していた。人々は彼を訪れ、いろいろな意味で彼はまだ威厳を保っていた。収入は減ったが、人間関係は続いていた。したがって、チーフとしての生活をほぼ死ぬまで享受していたと言える。

彼は非常に背が高く、名前はアングサだった。祖父の名前は孫に伝えられる。父の名前は、アングサの息子に伝えられる。したがって、アングサに息子がいないと大変なことになる。父の名前が消えてしまうのだ。男の子を持つと言うことは実に重要なことなのだ。アングサに息子が生まれないと父が大変な圧力をかけて来ただろうことは間違いない。父にとってはアングサの社会的地位よりも名前の継承ことの方がより心配なのだ。よほど金持ちで力がない限り、そして、町に住んでいない限り、こうした圧力からはのがれられない。

これはマラゴリ部族独特の習慣である。彼らはまだマラゴリというアイデンティティを保っている。マラゴリの本拠地では、人口も多い強力な部族で、祖父はその部族全体のチーフではなく、1セクションのチーフだった。この習慣は簡単には変わらないと考えられて

いる。

アフリカの部族社会では、部族間の抗争はいつも続いていた。独立後も、実際、そうした部族間の争いはなくなったわけではない。アングサが子供の頃も、そういう土地をめぐる部族間抗争があった。マラゴリは自分たちの土地を買い取ったことはなく、いつも力づくで自分たちのものにしてきたので悪名高い。部族社会の生活はそうした争いに満ちていた。祖父や曾祖父も度々争いに巻き込まれていた。だからこそ彼らは部族の者に尊敬されていた。アングサが小学校の頃、部族は、近隣の部族と争いを繰り返していた。マラゴリは、相手を押し返すことに成功した。1972年頃までは、そうしたことがあり、いつも平和というわけではなかった。しかし部族間抗争は、今日的な戦争とは違っていた。それほど組織化されたものでもなく、日中は静かで、暗くなってからどこかでわあっとときの声があがり争いが起こるといようなものだった。アングサは、叔父のひとりがその戦いに出ていったのを記憶している。彼は死なずに帰ってきた。

学校

アングサは、学校が好きではなかった。だが、ミルクをただでもらえるので行った。宣教師が無料牛乳の配布プログラムを教育センターでやっていた。子供たちはお腹をすかせていた。学校へ行けば、朝と昼にミルクをもらえた。学校へ行ったのは教育を欲してではなくミルクがほしかったからだ。

学校では、キリスト教について、それから歴史や地理を勉強した。教育は英語で行われ、国語であるスワヒリ語は一科目として教えられた。国全体では、900もの部族語があり、アングサたちは、スワヒリ語とはかなり違うマラゴリ語を話した。従って、ケニアではほとんどの人が3ヶ国語は話す。スワヒリを話すのはそうむずかしくない。バントゥーやその他の部族語の混合した簡単な言語だからだ。時間数は少なかったがすぐおぼえることができた。しかし英語は、学校できちんと覚えないと罰をうけた。

外の世界

学校にはラジオがあったが、小学校の7年生になるまで家にはラジオもなかった。ハイスクールに入って初めてテレビを見た。ラジオで音楽を聴くのは大好きだった。子供の頃、世界は謎に満ちていた。ラジオを一生懸命聞いていた。外の世界には関心がある一方、何だか怖かった。今でもおぼえているビッグニュースは、ケニアの初代大統領の死だった。小学校の高学年だった。外国のニュースはおぼえていない。外国とか、外国人とか、外国での出来事とかについて、ハイスクールのテレビでニュースを見たがとくにおぼえていない。スペインでのサッカーのワールドカップのことはおぼえている。それより前、オリンピックのマラソンでケニア人がヒーローになったことがあった。

ハイスクールの教師の半分は白人だった。イギリス人はまだ大勢いた。その頃、留学の可能性はある程度あった。しかし、アングサは、そういうことはあまり考えなかった。その頃の彼の夢は、ただ職を得ることだった。なんでもいいから、職を得て母を助けたかった。そのほかに何かになりたいというような夢はなかった。学校でも、教会でも、教育があれば職に就けると言われた。何でもよかった。仕事がほしくて学校に通った。

その頃、教師は最も尊敬される職業だった。小学校の教師でも同様である。今でも、教師はいい家に住み、そのころは威厳もあった。煉瓦や石で出来た家を建てられるのは教師だけだった。だからきょうだいたちも皆教師をめざしたけれど、後に失望することになった。今では、教育程度のずっと低い人々がビジネスで成功を収めることも珍しくないからである。

ハイスクールから大学へ

学校の科目で好きだったのは、数学、物理、化学などで、数学が一番好きだった。そこでアングサはナイロビ大学の工学部に進んだが、どんなサーベイをやることになるのか、全くわかっていなかった。彼は建物の強度などを計算する測量がやりたかった。そういうことを勉強するのだと思って入学したが、土地の測量をやらされることになった。

その頃は専攻を変えることはむずかしく、ほとんど機会はなかった。教育ローンもかかえていたので、仕方なく、自分のやりたいことを変えるしかなかった。4年間勉強して土地測量士になった。土地の広さを測量し、地図を作り、土地所有の境界を記す仕事である。政府の仕事は得られたが、給料は最も安い仕事だった。採用や昇進は、資格によるよりも、部族の要素が入っていた。大統領と同じ部族出身者が政府の要職のほとんどを占めていた。

測量士としての仕事をいやになるほどやった。同じことの繰り返しばかりだった。運良くオランダの奨学金をもらうまで4年間働いた。

オランダ留学

オランダでは新しいことを勉強できた。以前は、ただ、測量器械を読み、与えられた計算法を繰り返すだけだった。オランダでは、地理情報システム（GIS）を勉強し、ドイツとの国境に近い田舎町に2年間滞在した。

生活はとてもよかった。アングサが留学した大学は、ほとんど留学生ばかりだった。オランダ人はあまりいなかった。奨学金はオランダ大使館から、開発途上国に支給された。奨学金の支給基準は、最優秀の学生にではなく、途上国の発展にとって、有意義なことをやっている者、あるいは、オランダ政府が途上国で発展させたいと考えている分野にいる者、コミュニティの将来にとってより役に立つことをしている者に与える、ということだった。

国外に出たのは初めてだったが、新しい環境に適応するのは簡単だった。皆が歓迎してくれたし、言葉は英語だし、物価も安く、奨学金にも恵まれていた。2年間、ホテルのような国際学生寮に住んだ。カルチャーショックもなく、天候だけが問題だった。冬は寒くていつも陰鬱だった。それ以外はとても住みやすかった。

結婚

その頃アングサはもう結婚していて男の子がいた。27の時に結婚した。その1年後にオランダに行った。そして1年後に妻を呼び寄せた。結婚したときは、かなり辺鄙なところに住んでいて、転勤もあったので、彼女は仕事が出来ず、専業主婦だった。

妻とは教会で知り合った。同じ教会に通っていて、教会の熱心な活動家だった彼女のことは以前から知っていたが、デートしたのは6ヶ月間だけだった。知り合って急速に親しくなって、6ヶ月後に転勤になったので、結婚する決心をした。

オランダ留学の延長

オランダ留学は、最初1年間だけの予定だった。1年目の終わりに、二つの奨学金があり、彼は、今回は東アフリカの最もニーズの高い国を代表する学生としてこの奨学金を受けることが出来た。もうひとは、南米からの学生だった。彼は運がよかった。アフリカ人は21人のクラスに他にもいたが、ケニア人は彼ひとりだった。その奨学金のおかげで修士号の勉強をすることができた。

オランダでの生活はケニアとは大違いだった。先進国に暮らすのは初めてだった。彼らの住んでいた町自体が開発途上国の人たちを受け入れるために作られたのだった。外国人を歓迎し、オランダ人の学生がよく面倒を見てくれた。ホームステイ・プログラムもあった。オランダにはオランダ国籍を持った黒人が多く住んでいた。住みやすかった。オランダ人も英語を話してくれた。オランダでは、特に都会では、誰も自分を、他の人と違うとか新参者だとか感じないで済む。

帰国、JICA との縁

2年後に国へ帰り、教師になった。JICA が研究所を作り、土地測量をやっていた。新しい施設で、スタッフを必要としていた。ケニア人を何人も日本に送り込んで訓練していた。実際外国で訓練を受けてきた者は採用された。アングサは新しい挑戦が必要だと思ったので喜んでJICAで教えることにした。

アングサがオランダへ行ったときは、この施設はまだ出来ていなかった。帰ったときちょうど出来ていたので入った。日本人との働き方をおぼえた。何人かと友だちにもなった。3年働き、日本人スタッフのひとりが文科省奨学金を申請するよう勧めてくれた。彼とは長いこと一緒に働いていた。彼はアングサを評価し、奨学金の申請を手伝ってくれた。

三重大学への留学

アングサが三重大学へ来たのは何か研究をするため、博士号を取るためではなかった。2年の予定で帰るつもりだった。途中で運命が変わったけれど、それは想像もしていないことだった。

家族はケニアに残った。オランダにいたときも息子はケニアに残していた。妻が来たときは息子は祖父母と暮らしていた。日本に来ることになったとき、やはり別居することにした。今回は娘も一緒だった。息子は現在10歳で娘は6歳だ。ふたりとも父親であるアングサとあまり長く生活をしたことがない。日本に、2年以上も長く生活していることはアングサの本意ではなかった。

日本での勉強が終わったら、まず以前教えていた研究所に報告しなければならない。そこで何年か働く義務はないが、ケニアでは一番設備のよい施設だ。だからそこで働くのがいいと考えている。新しい資格があれば、より高い仕事を得られるだろう。大学の講師もできる。しかし大学ではJICAのような設備や施設がないのが問題だ。

彼は、インタビューが行われたときにはすでに3年余り日本に滞在していた。彼にとっては十分すぎるくらい長い時間だった。すでに修士号はもっていたので、三重大学では、語学研修をやっているときから、大学院に入れたので最短距離を辿ることが出来たが、それでも長く感じた。

アングサは、語学の勉強、特に話すことは好きだ。ほんとうに勉強したかったし、日本語を話すのは面白いと思った。研究室ではコミュニケーションが上手く取れる。指導教官は外国人なので日本語を話す必要はないが、研究室での日常会話には全く不自由していない。指導教官はアフリカ出身なので英語かスワヒリ語で話すことが出来る。自分と同学年のインドネシアからの留学生がひとりおり、今年もうひとり、ミャンマーの学生が入ってきた。

アングサの典型的な一日は、朝9時に研究室にやってくることから始まる。途中コンビニで朝食、大抵ミルクとサンドイッチを買い、それから勉強する。時々指導教官の授業にTAとして参加する。昼飯は、マフ（MAFF, Multicultural Association For Fun の略。留学生交流サークルの略称）の学生たちと食べる。1時に大学のカフェテリアに行き、彼らと話す。その後、研究室に戻り、6時まで勉強し、寮に戻り夕食を食べ、また研究室へ戻ってくる。

中途帰国

ケニアへは2002年の12月に戻った。インドでの会議に出るチャンスがあり、ついでに2ヶ月ケニアで過ごした。冬を避けることが出来て幸運だった。これはデータ収集のため

だった。データ収集には息子を連れて行った。国立公園で動物に関する情報を収集した。彼の研究テーマは、国立公園の中で季節毎に大移動を繰り返す群生動物の移動ルートを予測しその地域に暮らす人々との棲み分けに役立てようとするものだった。

家族と再会するのはなかなか大変だった。息子は彼をおぼえていてくれたが、娘は忘れていた。息子もおぼえてはいたもののあまり親しげではなかった。2ヶ月後にはふたりともアングサになつてくれた。しかし今度帰ったときはまた忘れているかもしれない。

家に帰ったときはうれしかったが、2ヶ月後、また出発が近づいたときはとてもつらかった。家族を連れてくることも考えたが、そうすれば妻は仕事を失う。また仕事を探すのは大変だし、18歳の養女もいるので、とても無理だった。彼女は遠い親戚だが、両親が死んだためアングサの家と一緒に暮らすようになった。ケニアでは普通のことだ。彼女は洋裁を習い、小さな店を開いた。家族5人で日本で暮らすのはあまりに大変だ。家を探さねばならないし、貯金はすべて食費で消えてしまうだろう。

三重に戻って

アングサにとって、3年半という長い間家族と離れて暮らすのは大変だった。家族がいないと、研究室にこもるようになる。気がつくとも一年が過ぎている。勉強へのプレッシャーや論文の締め切りがあって、時間は結構早く流れる。が、週末はどうしても寂しくなる。月曜から金曜までは何も気がつかない。しかし、家族と離れて暮らす、特に幼い子供たちと離れているのはつらい。だから一週間に一度15分だけ電話する。コネクションは悪くない。家族はナイロビにいる。電話代は高くつくが、それだけの価値はあるとアングサは思っている。

友人関係

親しい友人は、東アフリカ出身者、つまりケニアとタンザニアの学生たちだ。彼らとはきょうだいみたいなものだ。タンザニア出身者が5人いて、ケニアと共通のスワヒリ語を話すので友だちになりやすい。文化もほとんど共通である。彼らとはほぼ毎週会う。しかし同じアフリカ出身でもエジプト人の留学生とは前にいつあったか思い出せないくらいだ。

アングサは、日本人ともいい関係を保っている。日本人にいい友人がいる。マフの学生たちなど、皆彼よりずっと若いけれどよい友だちである。だが、研究室では同じような友人関係はない。研究室で過ごす時間の方がすごく長いのに、マフの学生たちのほうがオープンで話しやすいと思っている。研究室の学生たちとは、長い時間を過ごしても状況は変わらない。関係は深くない。彼にとって、友だちというのは研究室以外の人たちのことだ。

彼はマフのイベントにはほとんど参加している。マフは留学生にとってライフラインみ

たいなものだと思う。マフがないと留学生はやっていけない。唯一気分転換が出来るところだし、日本社会への一番いい窓口になっている。

彼にはホストファミリーがいるが、頻繁に会えるわけではない。彼には時間がないし、ホストファミリーの人たちもすごく忙しい。だから一年に一度会うぐらいだ。新年には呼んでくれるのでそのときは必ず行く。その程度だから、それほど親しいわけではない。

キリスト教会

アングサは日本でも教会に行っているんで、それを通して、たくさんの日本人やその家族と知り合いになった。大学近くの教会は一年ぐらいで辞めて、他の教会へ行くようになったが気に入っている。前の教会では外国人や日本人に会えるけれど、そこでの礼拝のやりかた、日本人向け英会話クラスなどの活動がいやになったので、遠くの教会に行くようになった。銀行で知り合った人の夫が三重大学で働いていて、その人たちの紹介で行くようになった。この家族はホスト・ファミリーのような存在になった。主人はアフリカに関心があり、タンザニアに友だちもいる。彼らを通していろいろな人たちと知り合いになった。

教会では、礼拝の英訳もある。ヘッドフォンを貸してくれて、外国人はジャマイカの女性と自分のふたりだけだが、三重大学のN教授ともうひとり、アメリカ在住の長い女性が通訳をしてくれる。クリスチャンとして、アングサは三重でとてもアットホームに感じている。プロテスタントの教会で、外国人をちゃんと受け入れてくれるし、様々な活動もある。先日は、アフリカについてのトークがあった。アングサはアフリカの子供たちのライフスタイルについて話した。たくさんの子供たちが聞きに来た。写真を見せたり歌を教えたり、子供の遊びを教えた。

教会へは日曜日毎に行くので寂しくないが、日曜日の午後が問題だ。日曜日の午前中はとても楽しい。教会の人たちを通して、大学外の日本人とも知り合いになった。外国人を歓迎してくれる。彼らとの交流をととても楽しんでいる。

アングサは、クリスチャンとして育っているので、生活の仕方にそれなりの制限がある。いろいろなところへ見学に行くのは好きだが、酒を飲みに行くとかには興味がない。ナイトクラブとかダンスに行くとか、そういうことも興味がない。だが人と話はしたいと思う。教会で大勢の人に会えたのは幸運だったと思っている。

人々の視線

アングサは、東京のような、外国人が多い大都会とは違って、三重に住んで町中を歩いていると、いつも人々の視線を感じる。何となく変わったもの、異様なものに対する視線だ。スーパーやデパートの中で、子供たちが驚いたように目を見張る。そういう視線に出会うと、自分の行動に関して慎重になる。オランダ留学ではなかった経験だ。

だが彼は、ヨーロッパの他の国でもっと露骨な経験をしているので、日本人の視線についてはそれほど気にしていない。ある国では、自分が脅迫されてでもいるような気がした。自分を凝視する人々の表情には軽蔑の念が感じられた。また、別の国では、アフリカ人仲間6人で電車に乗ると、周囲の人たちが席を立てて去って行き、警察官が職務質問にやってきた。三重ではそんなことはない。ただ変わったもの、物珍しいものを見るような視線をいつも感じるだけだ。警察官に身分証明書の提示を求められたこともない。ヨーロッパでの経験に比べれば、三重の人たちは概ね友好的だと彼は思っている。

帰国

アングサは、三ヶ月後には国へ帰るのがを楽しみにしている。研究はほぼ終わりに近づいた。いつ終われるかは自分では決められない。専門誌に論文が受け入れられるかどうかの返事を待っている。この最後の返事が自分を引き留めている。1ヵ月以内に返事が来ればとてもうれしい。9月に卒業できたら奇跡的だ。だが、彼は卒業できなくても9月には国へ帰るつもりだ。日本で待つことはそれ以上できない。ケニアへ帰って待つ。結果が出たら、ディフェンスのために戻ってくる。もう、子供たちにも指導教官にも帰ると告げた。指導教官もそれでいいと言った。なぜなら、待つのが1ヶ月か3ヶ月になるのかわからないからだ。仕事の方も、JICAが待っている。理解はある。教育機関なので、コースは遅れて始めることも可能だから。しかし、政府の職場へは10月のはじめには顔を出さねばならない。

日本に来たことについて、アングサとしては深い満足感を感じている。しかし、犠牲はほんとうに大きかった。ケニアに残してきた家族のことを思うと、犠牲は満足感より大きいくらいだと思っている。家族にとっては大きな犠牲だったのだ。家族のことだけを見ると、日本に来る価値はなかった。未婚の若い男が来て勉強した方がよかったと思う。ドクターは国ではほんとうに少ないから、彼としては誇りに思うのだが。

アングサは、選択肢があって他の国に行くとしたら、たぶん英語圏に行っているだろうと考える。日本に来たことの利点は、奨学金が完璧だったことだろう。働く必要がなかった。この点で、日本に来たことはプラスだった。ヨーロッパに行った友だちは、働きながら勉強しなければならなかった。(日本に来た)動機は、奨学金がすべてをカバーしてくれたことだ。

博士号を持ってアフリカに帰るのは大変だ。どっちかと言えば学位をもたないほうがいいくらいだ。責任があまりにも重い。周囲の人間の期待が大きい。子供の学校のことだとか、職を求めて、いろんな人間が押し寄せる。彼らは、アングサが金持ちで権力があると

思いこんでいる。彼が金持ちなどではないことを他人は理解しない。何も無いと言うと、隠しているんだろうと思われる。

何もかもできないとしても少なくとも少しは援助しないといけない。意志のあるところを見せなければいけない。それがアングサたちケニア人の文化だ。人々はおおっぴらに要求してくる。特に農村部に生まれたら、家に帰るたびに、人々が挨拶にやってきて援助を期待する。息子がハイスクールを卒業したので何とか仕事をさがしてほしい等々である。こうした要求からどう逃れるか？消えてしまう人もいる。アングサは幸いナイロビに住んでいるのでまだいい。ケニア人の多くにとって日本は神秘的でお金持ちの国、ということになってる。ナイロビに帰ったとたんいろいろな人が会いに来るだろう。

（日本に来る前は）アングサの日本のイメージも（他のケニア人と）同じようなものだった。今はいろいろなことがわかる。しかし、ケニアの人には説明不可能だ。彼らはアングサに教育委員会のメンバーになって欲しい、などと言うだろう。断ることは出来ない。自分たちを組織化して、何とかしてほしいと訴える。あんたが一番能力がある、と期待する。そう言うことをやっていると、財政的にも息詰まる。だから、大勢が墮落して取れるところから賄賂を取るようになる。何とか採算を取らないとならないからだ。

そうした事情があるから、大勢が博士号など取らないことを選ぶ。学位を取っていいことはない。幸せには慣れない。よりストレスが高まる。自分の指導教官は日本に住んでいてラッキーだ、とアングサは思う。しかし彼自身は他の国に住みたいとは思わない。英語圏でも同じだ。なぜかわからないが、一年以上（外国に住むのは）はごめんだ、と思う。これといってはっきりした理由もないが、やはり自分の国に帰りたい。

アングサの野心はそんなに大きくない。ちゃんとした家に住めて、子供たちがいい学校に行けて、家計をまかなえたら、そして、老後の生活ができるだけのものがあったら、それでいい。たぶん、小規模の収入につながるビジネスをやるだろう。ケニアでは、政府で働いている人が、同時に私的に教員もしている。政府の役人がパートタイム職につくことは法律違反だが、やらないと生きていけない。アングサは政府の上級職だがサラリーは、日本円にして、3万7千円から4万円だ。家賃を払って子供たちを学校にやったら何も残らない。だから法律違反でも誰もがやらざるをえない。

JICAの研究所では、毎日ひとつ講義があっただけだ。その他は自由時間なので、そこにいる必要がない。だから町で働くことが出来る。9時から5時まで勤務するというような態勢はない。

最初の留学を終えて帰国した当時は、3ヶ月ほど気持ちが落ち込んだ。オランダの清潔さに慣れていたので、バナナを食べたらその皮をそこら辺に放り投げる国の人々の無頓着

さに腹が立った。が、少しずつ立ち直った。日本留学を終えて帰国した自分が今度はどんな風になっているかについてはまだ分からない。2ヶ月ほど中途帰国したときは、自分が以前より寡黙になっていることに気付いた。たぶん、毎日研究室で静かに研究していたせいだろうと思った。カルチャー・ショックとカリエントリー・ショックにはとても興味があるが、日本に長く滞在した結果自分がどう変わったのかはまだ分からない。

アングサにとって、自分がケニアに帰国することは確かである。家族がいるからというだけでなく、ケニアという国の将来に希望を持っているし、ケニアでこそ自分は最も落ち着くことができると信じている。

参考文献

- ウヴェ・フリック著（小田博志他訳）『質的研究入門〈人間の科学〉のための方法論』春秋社 2002 年
- 中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂 1995 年
- 好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』せりか書房 2000 年
- 中野卓著『口述の生活史－或る女の愛と呪いの日本近代－』御茶の水書房
- オスカー・ルイス著（柴田稔彦・行方昭夫訳）『サンチェスの子供たち』みすず書房
- 上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房 2001 年
- 箕浦康子『日本における文化接触研究の集大成と理論化』平成 12 年度～13 年度科学研究費補助金 基盤研究（C）（2）2002 年
- J.ロフランド&L. ロフランド著（進藤雄三・宝月誠訳）『社会状況の分析』恒星社厚生閣 1997 年
- 桜井厚『インタビューの社会学』
- 桜井厚・岸衛編『屠場文化：語られなかった世界』創土社 2001 年
- D.W.ブラス（井上俊・杉野目康子訳）『日本人の生き方：現代における成熟のドラマ』岩波書店 1985 年
- S.マーフィ重松『多文化間カウンセリングの物語（ナラティブ）』東京大学出版会 2004 年
- 谷富夫編『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社 1996 年
- やまだようこ編著『人生を物語る：生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房 2000 年